

チアパス州内陸部における製塩関連遺跡の発掘調査

白鳥祐子（立正大学）

ブレント・ウッドフィル（ウィンスロップ大学）

発表者らは、2025 年 5 月から 7 月にかけてメキシコ、チアパス州内陸部に所在する 2 つの遺跡の発掘調査を実施した。この調査は、スペイン人による征服前後のチアパス州内陸部における製塩に関連した歴史的・考古学的遺跡の、調査・記録および情報拡充を目的としている。今回の調査は、2023 年に調査した 4 つの遺跡の中から、ソル・イ・パライズ遺跡とラ・トルトゥーガ遺跡の 2 遺跡に焦点をあて、試掘または発掘調査を実施した。ソル・イ・パライズ遺跡は、チアパス州東部ラカンドン密林内でも特に自然が残る生物圏保護区に所在しているため、考古学調査が制限されている。かなりの秘境にあり、遺跡にたどり着くまで 1 日半かかるこの遺跡は、1695 年にスペイン人によって征服されたラカンドン・ Chol 族最後の首都サク・バラムである可能性が高い。17 世紀の文献によれば、60km 離れた塩の産地で製塩しているラカンドン・ Chol 族が発見されているが、今回許可を得て生物圏保護区において試掘調査を実施し、建造物や製塩に関する遺物の探索を試みた。

もう一つの調査地ラ・トルトゥーガ遺跡は、チアパス州中央高地にあるイクスタパ市にあり、市街地から谷を挟んで台地状の尾根に遺跡が広がっている。谷には塩分を含む川が流れており、川岸の井戸は先スペイン期から現在までかん水が汲み上げられている。17 世紀の文献によれば、井戸は共同財産で誰でも製塩ができ、塩を販売することができたとあるが、現在は 1 家族のみが製塩・販売を担っている。ラ・トルトゥーガ遺跡は井戸近くにあるため、先古典期の時代から製塩や塩の交易に関係していたと考えられる。これまでにかん水を蒸発させるための土器が出土しているが、より多くの遺物獲得のため、球技場のトレンチ発掘を実施した。

本発表では 2 つの遺跡の発掘調査報告と、関連する歴史史料を提示しながら、調査を通じて得られたデータを基に、これらの遺跡における製塩について考察する。

メキシコの学校博物館に関する調査

村野正景（静岡大学）

渡辺裕木（慶應義塾大学）

多数の考古・歴史資料が学校に所在するのをどれだけの方がご存じだろうか。日本では、学校所在資料が人口減少や制度的問題等の多様な要因で、文化財保護関係者の知らぬまま、散逸・消失の危機にある。学校に所在する資料をどう管理・活用すればよいか、重要な課題である。

その点で、メキシコに注目すべき取組があった。学校博物館プログラムである。先行研究により、学校内に教員や生徒・児童の手で博物館的施設をつくり、資料収集や保存、調査、展示といった博物館的活動を学校授業の一環としておこなって、文化遺産への関心向上やその保護意識の涵養などを図る教育プログラムであったこと、1970 年代から 80 年代にかけて国家プロジェクトとしてメキシコ国立人類学歴史学研究所 (INAH) が主体の事業であったこと、全国で 1,000 以上設置されたことなどが明らかにされている。

この事業は、少なくとも 2 つの観点から、重要と考える。1 つ目は、上述の課題に対応したもので、現在の日本にない国家主導の取組であり、学校博物館運営の貴重な比較研究事例となること。2 つ目は、メキシコにおいて考古資料ないし歴史遺産が社会へ与えた影響を分析する新たな対象となることである。

しかし実は、先行研究は概要紹介にすぎず、個別の事例において、どう学校博物館が運営され、資料が活用され、どんな課題があったのか等の詳細は不明だった。そもそも一体どの学校に学校博物館が設置されたのかが既往の研究ではまったくわからなかった。そのため、2 点目の研究素材ともされてこなかった。

ところが発表者らの調査によって、INAH の歴史アーカイブに関連資料が 16 箱保管されていることが判明し、2025 年 8・9 月に資料調査を実施した。これにより学校博物館リストが明らかになり、そこで保管する考古資料の存在や参加教員が抱いた課題などがわかってきた。本発表ではこうした成果を広く共有し、次の実地調査等に向けた議論の機会としたい。

カンパナユック・ルミ遺跡第 7 次発掘調査速報：神殿における石造階段の発見

松本雄一（国立民族学博物館）

ユリ・カベロ・パロミーノ（ペルー国立サン・マルコス大学）

近年の考古学的調査の進展により、ペルー中央高地南部がアンデス文明の初期形成に大きな役割を果たしたことが明らかになりつつある。特にアヤクチョ州に位置するカンパナユック・ルミ遺跡において 2007 年以我々が行ってきた調査は、同遺跡が形成期中・後期（紀元前 1000-500 年）において神殿として地域間交流の結節点となっていたこと、神殿を中心として複合的社会が出現したことを明らかにした。本発表は 2025 年 8-9 月に行われたカンパナユック・ルミ遺跡における発掘調査の速報である。今回の発掘調査では、これまで調査してこなかった西基壇に加えの発掘を重点的に行った。

西基壇は、これまでの調査で中央階段や円形広場など形成期神殿の代表的な建築要素が確認された東基壇（中央基壇）に方形半地下式広場をはさんで正対する基壇である。カンパナユック・ルミ遺跡の神殿建築の特徴である U 字型の基壇配置において、その U の開いた部分を閉じるように位置している。西基壇は建築の境界が地中に埋まっており、その範囲を確定することが困難であったため、対面の中央基壇の中心軸に沿った形で、広場と基壇をつなぐ長さ 30m 幅 2m のトレンチを設けた。その結果、10 段の磨き石によって構成される、高さ約 4m、幅 2.5m の見事な石造階段が出土し、さらにその先からは中央広場へと下る割り石で造られた 4 段の階段が出土した。紀元前 800 年ごろに建造されたと推定されるこれらの建築は中央高地南部に位置する同時代の神殿建築に類例が確認されないものであり、カンパナユック・ルミ神殿がチャビン・デ・ワントル神殿と密接な関係を持ち、同地域における中心的な神殿として例外的な存在であったことを示している。これまで我々が論じてきた、神殿間のネットワークにおける階層性の存在を裏付ける発見であり、アンデス文明の初期形成過程が地域間交流と密接にかかわっていたことを示すデータと位置づけられるだろう。

チュパ・ビスカパルカ遺跡における第 2 次発掘調査

土井正樹（関西外国語大学）

フレディ・ワマン・リラ（チュパ遺跡考古学プロジェクト）

メリア・ルス・キンタニージャ（チュパ遺跡考古学プロジェクト）

アンデス地域の編年上、紀元後 650 年～1000 頃までの時代は中期ホライズンまたはワリ期と呼ばれ、ワリ帝国が栄えた時代として知られている。このワリ帝国の起源に関し、現在アヤクーチョ谷のワルパ文化を担う人々と、南海岸のナスカ文化を担う人々の交流の活発化がきっかけになったと考えられている。しかしアヤクーチョ谷内部では、そのような交流の証拠となるナスカ文化の土器は報告されておらず、どこで、どのようにアヤクーチョ谷とナスカ地域の人々が交流していたのかは不明である。

そのような交流の実態解明の手がかりとなると考えられるのがチュパ・ビスカパルカ遺跡である。この遺跡は中央高地南部のアヤクーチョ谷と南海岸のナスカ地域結ぶ直線のほぼ中間の、標高 3400m の地点に位置している。この遺跡の最初の調査は、1994 年にメリア・ルス・キンタニージャによって行われ、ナスカ文化の土器およびナスカ文化と同時代のカハ様式の土器の存在が確認されている。カハ様式は、ワリ帝国の母胎と考えられているワルパ文化（紀元後 250～650 年頃）との関わりが深く、カハ様式とワルパ文化の土器の共伴例も報告されている。そのため、チュパ遺跡を調査することにより、ワルパ文化とナスカ文化の担い手の人々の交流の様子を明らかにできるのではないかと考えた。

このような問題意識のもと、2020 年にわれわれはチュパ・ビスカパルカ遺跡の第 1 次発掘調査を実施した。しかし、この調査では調査範囲が 2m×10m の範囲に限られたため、遺跡の一般的特徴を明らかにするまでには至らず、ワルパ文化に関する直接的な証拠も見つけることはできなかった。そこで今年の 8 月、遺跡の一般的特徴の解明とワルパ文化に関連する証拠を見つけるために、第 2 次発掘調査を実施した。発掘調査に先立ち、ドローンによる写真撮影と GNSS 情報を組み合わせた高精度の測量調査も実施した。本発表では、これら測量調査と今回の発掘調査で得られた成果について報告する。

ペルー、ワヌコ盆地の地方発展期に関する予備的調査：クルスパタ遺跡の事例から

佐藤優音（総合研究大学院大学）

金崎由布子（東京大学総合研究博物館）

大谷博則（クエバ・デ・ラス・ピラミデス考古学プロジェクト）

村瀬正紘（総合研究大学院大学）

マリッサ・カッサーニ（ペルー国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学）

ケビー・フローレス（ペルー国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学）

ペドロ・アンヘレス（ペルー国立サンティアゴ・アントネス・デ・マジョロ大学）

ホセ・オノフレ（ペルー文化庁ワヌコ支局）

本発表では、2025 年 9 月に行ったクルスパタ遺跡の試掘調査の結果をもとに、ペルー共和国ワヌコ盆地の地方発展期について得られた知見を報告する。

ワヌコ盆地の地方発展期はイゲーラス（Higueras）期と呼ばれ、紀元前約 50 年から始まるとされている。しかし、その編年上の位置付けが明らかになっているとは言い難く、特にその終了年代を論じるための考古学的データは現在まで得られていない[Matsumoto 2020]。地方発展期には、アンデス各地で様々な形態の社会が現れ、初期国家や新たな宗教的権威、軍事力が登場する。一方で、これまで調査されたワヌコ盆地のイゲーラス期の遺跡からは、この地域における防御的な設備の痕跡や戦争を示す図像は見つかっていない。これまでイゲーラス期に主な焦点を当てた調査は行われてこなかったが、この時期は、国家とはじめとする同時期のアンデス各地の様々な形態の社会と並行して存在しながらも、そのいずれとも異なる方法で社会統合の在り方が存在した可能性を示す重要な事例であると考えられる。

そのため本研究では、イゲーラス期に新たに大規模な基壇が築かれたクルスパタ遺跡に着目し、遺跡の利用時期と利用の性質を明らかにするために遺跡内の 3 箇所を試掘を行った。クルスパタ遺跡は、ワリャガ川上流域に位置し、コトシュ遺跡から 2km ほど西側に位置する。当遺跡では 2015 年にペルー人考古学者による調査が行われており、形成期と地方発展期の利用があったことが報告されている[Onofre 2018]。

今回行った基壇上部の部屋状構造物の発掘からは、イゲーラス期に作られた部屋を放棄する際に床の一部を破壊し、土器や石器を埋納したのち部屋を埋めたことがわかった。また、基壇から 150m ほど北東に離れた区域にある不定形な建築の発掘からは、この区域が基壇とは異なる目的で利用されていたことがわかった。本発表では、以上の調査の結果とそれらを踏まえた今後の展望について報告する。

参考文献

Matsumoto, Yuichi

2020 *Prehistoric Settlement Patterns in the Upper Huallaga Basin, Peru*. The Yale Peabody

Museum, New Haven.

Onofre Mayta, José Antonio

2018 Cruzpata: excavaciones arqueológicas en un asentamiento temprano del Alto Huallaga. *Actas del III Congreso Nacional de Arqueología Volumen II*: 7-26.

Grosboll, Sue

1988 An archaeological approach to the demography of prehispanic Andean communities. dissertation. Madison: University of Wisconsin, Department of Anthropology. 794 pp.

パコパンパ考古遺跡複合における紡織とラクダ科家畜導入に関する一考察

荒田恵（天理大学附属天理参考館）

関雄二（国立民族学博物館）

鶴澤和宏（東亜大学）

フアン・パブロ・ビジャヌエバ（ペルー国立サン・マルコス大学）

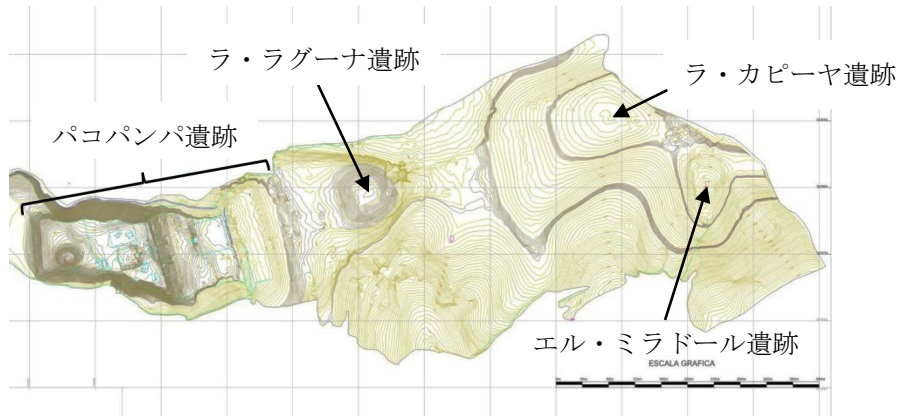
ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

パコパンパ考古遺跡複合はペルー北部高地に位置する形成期中期から後期の神殿遺跡群で、パコパンパ、モンティクロ・ラグーナ、ラ・カピーヤ、そしてエル・ミラドルの 4 つの神殿遺跡から成る。本発表では、そのうちのパコパンパ遺跡とラ・カピーヤ遺跡から出土した紡錘車について分析を行い、ラクダ科動物の毛の利用について考察を行う。

パコパンパ考古遺跡複合のなかでも集中的に発掘調査が行われたパコパンパ遺跡では、形成期後期に相当するパコパンパ II 期（前 700 年頃～前 500 年頃）になるとラクダ科動物の出土量が顕著に増加する。そのため、この時期から家畜として導入されたと推定されている。一方で同時期にはシカの狩猟が継続されていたことから、食料供給の安定を目的としたものではなく別の要因によりラクダ科家畜が導入されたと想定されている。その一つが毛の利用である。

その根拠となっているのが、2005 年～2012 年の発掘調査で出土した紡錘車の分析結果である。パコパンパ遺跡では形成期中期に相当するパコパンパ I 期後半の IB 期（前 1000 年頃～前 700 年頃）から紡錘車が出土し始めるが、II 期前半の IIA 期には出土量が増え、II 期後半の IIB 期ではその数はさらに急増する。この紡錘車の出土変遷が、パコパンパ遺跡における偶蹄類に占めるラクダ科動物の割合の増加傾向と比例することから、ラクダ科家畜を導入した目的の一つに毛の利用が含まれると仮定した。

本発表ではこの仮説を検証するため、撚る繊維によって紡錘車の法量が定まることを論じた先行研究に基づいて、紡錘車の分析データを提示する。なお分析対象には上記の紡錘車にくわえて、未分析であったパコパンパ遺跡から出土した紡錘車、およびパコパンパ I 期に相当する出土資料が充実しているラ・カピーヤ遺跡の紡錘車を含めた。そしてこれらの分析結果をもとに、パコパンパ考古遺跡複合における紡織とラクダ科家畜の導入について考察を行う。



パコパンパ考古遺跡複合測量図 ©パコパンパ考古学調査団

古代文化の解釈プロセスにおける博物館の役割 ―ペルー共和国北海岸ランバイエケ地域を例に

三浦彩（山形大学）

近年、遺跡や考古遺物の保存や活用に際して、考古学者だけでなく、考古学者とそれ以外の人々らの協同が求められる。しかし両者には専門知識の差に加え、遺跡や考古遺物のどこに価値を見いだすかという点においても差異がある。遺跡や考古遺物の価値とは、あくまで現在における解釈であり、変化あるいは併存しうるものだからである。これらの問題を超えて考古学者と人々が協同する場所として、博物館という場所は大きな可能性をもっている。

調査対象であるペルー北海岸ランバイエケ市は、紀元前後から後 8 世紀頃にかけてモチェ文化が栄えた地域である。モチェ文化は、観光地となった遺跡、考古遺物を元にしたデザイン、モチェの子孫を自認する人々など、現在の社会においても様々な形で存在している。現在のモチェ文化は、現在において価値をあたえられた遺産であり、政治的・社会的・経済的な意味合いをもつ複雑な動態としてとらえることができると考える。本研究では、この動態において、学術的な知識と多様な過去の解釈のバランスを取る場としての博物館の役割を示すことを試みる。

具体的には、ランバイエケの 2 つの博物館、国立シパン王墓博物館と国立ブリューニング考古学博物館の活動が、地域住民のもつモチェ文化イメージの形成に与える影響を調査する。調査にあたっては、先行研究において調査対象とされてこなかった考古学者も、遺跡や考古遺物に関わる一主体として捉え直す。そのため、地域住民に加え、博物館勤務の考古学者ほかスタッフへの聞き取り調査と、考古学者の古代文化への解釈が現れる展示の分析を行う。これによって、知識を共有し市民と協同する場所としての博物館のあり方を考察するとともに、社会との関わりが重視されている博物館という場の、持続可能性や今後の展望を探ってみたい。

本発表では、一回目の調査として本年 9 月に行った展示分析及び考古学者に対する聞き取り調査について報告する。

ペルー北海岸ワカ・ファチョの発掘調査

服部拓（山形大学）

中島瑠花（山形大学）

松本剛（山形大学）

ガブリエラ・デ・ロス・リオス（ランバイエケ複合考古学プロジェクト）

ジャン・ポール・ニエベス・コルドバ（ランバイエケ複合考古学プロジェクト）

渡辺幸奈（京都大学）

三森小夏（山形大学）

本発表は、ワカ・ファチョを対象に行われた過去 2 シーズン（PIACL2023・2025）の発掘調査成果についての報告である。ワカ・ファチョは 1940 年代のジェームズ・A・フォードによる調査でモチエとワリの要素が融合した図像が報告された遺跡であり、モチエ～ランバイエケ移行期に該当する数少ない遺跡の一つである(Donnan 1972)。長らく所在不明であったが、2022 年の LiDAR 測量(PIACL2022)により再発見された。

2023 年、2025 年の調査では、ワカ・ファチョがモチエ～ランバイエケ期にかけて利用されたモニュメントであることが確認されたとともに、さらに長期にわたる利用が示唆された。

調査区 1 では、モチエ～ランバイエケ期の遺物を含む埋土で覆われた床面が発見され、さらにその下から部屋構造が見つかった。また、調査区 2 では基壇とその上に築かれた 2 つの大きな壁が見つかり、壁間の基壇の包含層からモチエ後期の遺物が出土した。調査区 3 では複数時期にわたる建築の増設が確認され、建築に関連するモチエ～ランバイエケ期の可能性があるマーク付きアドベの列が見つかった。調査区 4 の北側からは、ドナンの報告に類似する線画のある壁が確認されたほか、南側の比較的浅い層位で検出された構造物の埋土からは彩色壁の残骸が見つかった。これらは、マウンド中央部に壁画や彩色を伴った建築物が複数存在していた可能性を示唆している。

4 つの調査区では、いずれも床面に直に関連した遺物の出土は少なく、ほとんどの遺物が包含層から出土した。また、一部の床面は丁寧に砂で埋められて次の床が張られていた。これは建築の増設に伴う清掃や儀礼的埋葬を示唆するものであり、ワカ・ファチョがモニュメントとしての機能を有する証拠であるといえる(Shimada 1981, Izumi and Terada 1972 など)。また、4 つの調査区のうち 3 つで複数の形成期の土器片や円錐形のアドベが確認されたほか、チム一期の遺物も散見された。これはワカ・ファチョに形成期の建築が存在する可能性を示唆するとともに、チム一期までの長期的かつ連続的な利用の可能性を示すため重要である。

引用文献：

- Donnan, C. B. (1972). Moche-Huari Murals from Northern Peru. *Archaeology*, 25(2), 85-95.
- Izumi, S., & Terada, K. (Eds.). (1972). *Andes 4: Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Shimada, I. (1981). The Batán Grande-La Leche Archaeological Project: The First Two Seasons. *Journal of Field Archaeology*, 8(4), 405-446.

モチェ～ランバイエケ移行期における粗製土器の編年
ーワカ・ソレダーの発掘調査成果からー

渡辺幸奈（京都大学）

松本剛（山形大学）

ガブリエラ・デ・ロス・リオス（ランバイエケ複合考古学プロジェクト）

服部拓（山形大学）

中島瑠花（山形大学）

三森小夏（山形大学）

ペルー北海岸ランバイエケの土器編年は、長らく混乱の中にあった。その端緒はウーレ(1913)の研究にさかのぼる。彼はモチェ谷で写實的造形をもつ土器群と黒色に還元焼成された土器群を区別し、後者を「チムー黒色土器」としたため、ランバイエケ的要素は長らくチムーの範疇に吸収され、固有の展開が見えにくくなった。ラルコ・オイレ(1948)は、自らの七時期編年において「融合期」の文化としてランバイエケを位置づけ、吊り上がった眼をもつ神像表現や黒色土器を指標としたが、やはりモチェからチムーへの過渡期として理解するにとどまった。ミーンズ(1931)はナイムラップ伝承を 12 代の王統に換算して年代化を試み、場合によってはモチェやチムーと同時代とするなど、神話を歴史に読み替える試行が編年の混乱を助長した。さらにコソック(1959, 1965)は北海岸文化を A～E 期に区分し、ランバイエケを C 期（AD 1000～1200 頃）に位置づけたが、それは灌漑網や伝承との対応を根拠とする推測的体系にとどまった。セバージョス(1971)もまた「Lambayeque I」を A-F 型に細分類し、ワコ・レイなどの黒色土器を指標としたが、モチェからの派生とみなす立場であり、独立した層位年代の裏づけを欠いていた。

この混乱を克服すべく、シマダ(1990)はワカ・デル・プエブロ・バタン・グランデ (HPBG) の発掘にもとづき、前・中・後期シカンの三時期編年を提示した。しかしその指標となったのは主に埋葬コンテクストから出土する精製黒色土器ワコ・レイであり、粗製土器しか伴わない居住址や日常的活動の場には適用できなかった。これは、モチェの編年が細線画土器や象形土器に依存し、生活土器の時間枠組みを十分に解明できていない問題と相似をなす。精製土器依存の編年体系は、社会の死と儀礼に偏重し、生活世界を捉えるには限界を抱えているのである。このような状況においては、粗製土器の編年構築が急務である。

本発表では、2025 年 8 月～9 月に行ったポマ森林歴史保護地区のワカ・ソレダーの発掘調査出土資料をもとに、モチェ～ランバイエケ移行期における粗製土器の編年を行う。本調査では、モチェ～ランバイエケ移行期に属する略完形の人面土器が出土した面の上下から、有頸壺と皿・浅鉢類が出土した。この出土状況に基づくと、二段屈曲の有頸壺は頸部が寝るものから漸移的に立ち上がり、屈曲部にナデを施すといった変化を辿る。他方、皿・浅鉢類は型式変化に乏しく、一貫して素縁で高台が付く。また、未調整の器面が平滑で粘土紐接合

痕が見られないことから、型成形と考えられる。

本調査では確実な中期シカン期の土器は出土していないが、大広場にて実施した発掘において、中期シカン期に属する、本調査出土品からの型式変化が想定される有頸壺と型成形の皿・浅鉢類が出土している(Matsumoto 2014)。このことから、粗製土器には中期シカン期に至っても製作技術が継承されていることが指摘できる。本研究は土器編年の構築に寄与するとともに、モチェからランバイエケへの移行プロセスの解明に一石を投じるものである。

引用文献：

Kosok, Paul

1959 El valle de Lambayeque. In *Actas y Trabajos del II Congreso Nacional de Historia del Perú (época pre-hispánica), 4-9 de agosto de 1958*, pp. 49-67. vol. 1. Centro de Estudios Historico-Militares del Perú, Lima, Perú.

1965 *Life, Land, and Water in Ancient Peru: An Account of the Discovery, Exploration, and Mapping of Ancient Pyramids, Canals, Roads, Towns, Walls, and Fortresses of Coastal Peru with Observations of Various Aspects of Peruvian Life, Both Ancient and Modern*. Long Island University Press, New York.

Larco Hoyle, Rafael

1948 *Cronología arqueológica del norte del Perú*. Sociedad Geográfica Americana, Buenos Aires, Argentina.

Matsumoto, Go

2014 Ancestor Worship in the Middle Sicán Theocratic State. Ph.D. Dissertation. Department of Anthropology, Southern Illinois University at Carbondale, IL

Means, Philip Ainsworth

1931 *Ancient civilizations of the Andes*. Scribner, New York.

Shimada, Izumi

1990 Cultural Continuities and Discontinuities on the Northern North Coast of Peru, Middle-Late Horizons. In *The Northern Dynasties: Kingship and Statecraft in Chimor*, edited by M. E. Moseley and A. Cordy-Collins, pp. 297-392. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Uhle, Max

1913 *Die Ruinen von Moche*. *Journal de la Société des Américanistes de Paris* 10:95-117.

Zevallos Quiñones, Jorge

1971 *Cerámica de la Cultura “Lambayeque” (Lambayeque I)*. Universidad Nacional de Trujillo, Trujillo, Perú.

儀礼と景観の結節としての低密度・分散型都市「シカン」
ーアンデス文明における都市概念の再構成

松本剛（山形大学）

ガブリエラ・デ・ロス・リオス（ランバイエケ複合考古学プロジェクト）

渡辺幸奈（京都大学）

服部拓（山形大学）

中島瑠花（山形大学）

三森小夏（山形大学）

アンデス文明史における都市の定義は、長らく人口集中・公共性・制度化を前提とする旧大陸的モデルに依拠してきた。しかし、文字を持たず儀礼・景観・祖先崇拜を基盤としたアンデス社会を説明するには不十分である（Makowski 2008）。本発表は、ペルー北海岸ランバイエケ文化の首都シカンを事例に、都市概念とアーバニズムを理論的に再構成する試みである。

都市論の古典的出発点であるチャイルドの「都市革命」論（1936, 1950）は、人口増加と余剰生産を前提とした線形進化モデルであった。トリガー（1972, 2003）は国家と都市の成立が必ずしも連動しないことを指摘し、都市形成の多様性を強調した。さらにスミス（2003）は都市を「要素の束（bundle of features）」として定義し、多様な社会的相互作用が集約される場と位置づけた。近年、フレッチャー（2011）の「低密度アーバニズム」論は、マヤやアンコールを例に、人口が広域に分散しつつ儀礼や水利によって結束する都市形態を提示し、旧大陸的モデルの限界を一層明確にしている。

こうした理論的転換を踏まえると、アンデスの都市も人口規模や制度装置ではなく、儀礼・景観・技術の結節から捉える必要がある。筆者らの LiDAR 測量（2022・2023 年）は、シカンが総面積 45 平方キロに及ぶ分散型都市であったことを明らかにした。ラ・レチェ川旧河道を境に、南部はピラミッド群と大広場を中心とする祭祀セクター、北部は居住・農耕セクターに二分され、それぞれ異なる水系に依拠していた。この二重構造は行政官僚制ではなく、儀礼と水利管理を結節とする都市秩序、すなわち「行政＝宗教センター」の存在を示している。

これまでの発掘調査も都市像を刷新する。シカン・コアの大広場では祖先崇拜・饗宴・人身供犠の痕跡が確認され、200 名近い犠牲者を伴う窪地や金属副葬品を含む墓が見つかった。饗宴にてエリートが使用する給仕土器の粗製化やモチエ女性期の武器副葬は、多民族・多階級的社会の緊張を物語る。他方、ランバイエケ美術やデンヴァー・ビーカーに描かれた循環的秩序観（Mackey and Pillsbury 2013）は、LiDAR で可視化された空間構造と呼応し、都市空間が権力と宇宙観を物質化する舞台であったことを補強する。

さらに本年度、モチエからランバイエケへの移行期に建設されたと見られるワカ・ソレ

ダーとワカ・ファチョを発掘した。セルバンテス（2020）が指摘するように両遺跡周辺では冶金関連遺物が多く、エリートの技術独占が権力掌握に直結した可能性がある。ファチョでは移行期の居住層を確認し、地域占有の継続性が示された。ソレダーでは二つの基壇間から分厚い灰層と多数の鉱滓を検出し、直接的な炉や道具は未確認ながら、近隣に冶金工房が存在した可能性を強く示す。これらはシカン創生期に冶金生産が都市秩序と権力形成に深く関与したことを補強する。

総じてシカンは、祭祀・農耕・冶金・居住が分散的に交錯する〈低密度・分散型儀礼都市〉であった。その都市像は人口規模や制度装置ではなく、儀礼・景観・生産の結節として成立し、旧大陸的モデルの批判的再定位を迫る。LiDAR と発掘成果を統合した本研究は、アンデスのアーバニズムの独自性を示すとともに、比較文明論的文脈に都市と国家の普遍的理解を拡張する新たな視座を提供する。

引用文献：

Cervantes Quequezana, Gabriela

2020 Urban Layout and Sociopolitical Organization in Sicán, Perú, Ph.D. Dissertation.
Department of Anthropology, University of Pittsburgh, Pittsburgh, PA.

Childe, Vere Gordon

1936 Man Makes Himself. Watts & Co. Ltd., London, UK.

1950 The Urban Revolution. The Town Planning Review 21(1):3-17.

Fletcher, Roland

2011 Low-Density, Agrarian-Based Urbanism: Scale, Power, and Ecology. In The Comparative Archaeology of Complex Societies, edited by Michael E. Smith, pp. 285-320. Cambridge University Press, Cambridge, UK.

Mackey, Carol J., and Joanne Pillsbury

2013 Cosmology and Ritual on a Lambayeque Beaker. In Pre-Columbian Art & Archaeology: Essays in Honor of Frederick R. Mayer (Papers from the 2002 & 2007 Mayer Center Symposia at the Denver Art Museum), edited by Margaret Young-Sanchez, pp. 115-141. Denver Art Museum, Denver, CO.

Makowski, Krzysztof

2008 Andean Urbanism. In The Handbook of South American Archaeology, edited by Helaine Silverman, and William H. Isbell, pp. 633-657. Springer, New York.

Smith, Monica L.

2003 Introduction. In The Social Construction of Ancient Cities, edited by Monica L. Smith, pp. 1-36. Smithsonian Books, Washington, D.C.

社会名称「タワンティンスユ」の源泉

大平秀一（東海大学）

インカの科学的研究は、John Howland Rowe の 1946 年の論文” Inca Culture at the Time of Spanish Conquest” に始まるといわれる。その研究史は、わずか 80 年に過ぎない。その間、インカに関する学術書、一般書、調査報告書、展示カタログ等、これまでに世界中で多くの書物・論考が刊行されてきた。あえてここで再確認するまでもなく、これらの出版物や博物館展示では、インカの自称・国家名称が「タワンティンスユ」（4 つのスユ [地方]）と説明されている。

この名称・説明は、クロニカの記述に依拠したものにすぎない。当時の先住民社会は文字をもたず、クロニカの史料批判には大きな困難を伴う。インカを扱う大半の研究者は、その専門性が故に、クロニカ間の記述を突き合わせることもあるにしろ、イベリア半島の社会・文化・歴史的背景を十分に捉えた上で記述を読み解くわけではない。したがって、クロニカに残された記述が時にそのまま先住民の歴史あるいは社会・文化的特徴とも化し得る。「タワンティンスユ」がアンデスの先住民言語の一つケチュア語であることも影響し、その名称の真偽はさほど議論されることもなく、それどころかその名称・数を基に社会構造・社会的特徴の分析・考察・解釈も数多くなされ、中には定着している説もある。一方で、中心地に政治的権力・君主・宮廷をおき、4 つの領域・部分からなる帝国・王国という意味付けは、西洋的特徴・解釈そのものと捉えることも可能である。実際に、「スユ（スヨ）」を付したアンデス先住民社会の名称など、インカ以外には存在しない。

「スユ（スヨ）」という語に関しては、すでに 1534 年の *Sánchez de La Hoz* の記録にみとれる。そこでは、「ハウハ市から、クスコの道は海から離れて広い土地に向かっていく。クスコに邸宅・居を持ち、そのクスコから来た領主たちは、キト方面の土地をカンカスエティオ (Cancasuetio)、コリャオというその先の地方をコリャスヨ (Collasuyo)、海岸部をコンディスヨ (Condisuyo)、奥の方をコンダスヨ (Condasuyo) と呼んでいた。このように、領地を区切る十字架のような形になったこれら 4 つの地方に名前を付けていた」とあり、征服直後で社会の全体像把握が困難な時期にもかかわらず、すでに 4 つの地方に言及されている。1530 年代の記録では口裏を合わせたかのように、すべてのクロニカで「スユ（スヨ）」に言及されている。しかしながら、征服から 38 年間、4 つの地方に触れる者こそあれ、「タワンティンスユ」という名称そのものは、Cieza de León や Juan de Betanzos を含めていかなる記録でも言及されず、1571 年の Polo de Ondegardo の著作ではじめて示される。

本研究発表では、ケチュア語における「スユ（スヨ）」の観念、イベリア半島における同様の語の意味合い・社会名称の事例を示し、インカの自称「タワンティンスユ」の源泉がイベリア半島にあり、同半島の一つの社会名称・王国の通称がケチュア語で示されたにすぎないことを指摘する。

オルメカからマヤへ：言語学からの視点

八杉佳穂（国立民族学博物館）

オルメカの言語は原ミヘ・ソケ語といわれてきた。それを裏付ける証拠はまだ充分ではないが、点(1)と棒(5)による数表記法は 5 進法-20 進法に基づくものであり、中米にこのような数え方をする言語はミヘ・ソケ語以外になく、ミヘ・ソケ語の数体系を反映したものと考えられる。たとえばコロニアル・ミヘ語の 6 から 9 は、tuduuc(1+5), huextuuc(2+5), tuctuuc (3+5), taxtuuc (4+5)という形成法を取る。

文字としてもっとも古いもののひとつである「カスカハルの石塊」(62 文字、前 900 年頃)の言語を特定することは難しいが、オルメカ時代からかなり経った 8.5.16.9.7 5Manik 15Pop (156.7.11)と 8.5.3.3.5 13Chicchan 18Uo (143.5.19)をしるす「モハラ石碑」(535 文字)や「トゥシュトラの小像」(162.3.13)や「地峡の仮面」の裏面の文字などには、形成期マヤのサン・バルトロの文字やのちの古典期のマヤ文字に使われる文字の元となったと思われる文字がみられる。

たとえば T23(na)は、「大地」を表わすミヘ語の naax、ソケ語の nas をもとにするものと思われる。

ma という文字(T74)は、ミヘ語の「偉大な」məh(トントンテペック・ミヘ語)~mih(コアトラン・ミヘ語)、ソケ語の m[^]ha からきたものと考えられる。ma はマヤ諸語では専ら否定語であるが、タイトル mahk'ina に使われる ma は「偉大な」に由来するものと考えられる。また「南」の文字にも T74(ma)が使われている。「南」はユカテクマヤ語で nohol であり、noh は「偉大な」という意味である。

kakaw を表わす文字は音節文字で ka-ka-wa と書かれている。kakaw はミヘ・ソケ語の kakawa からの借用である。

ユカテク語の-lah は体勢動詞の完全相(過去形)を表わす接尾辞である。それが 650 年頃から-wan に置き換わる例がみられるようになる。ユカテク語から Chol 語群のことばにかわった証拠とみられている。Chol 語群がペテンに侵入し、一部おきわかっていき、古い形が周縁のユカテク語に残ったとすると、方言圏論に合う。しかし Chol 語群の特徴のひとつである *k, *k' >ch, ch' への変化はみられないし、ユカテク語の *t, *t' >ch, ch' へ変化した形もみられない。文字は保守化するものであるという一般的定理を十分に考慮する必要がある。

ユカテク語で書かれた「スイワの謎」という一連の謎かけと答が『チュマイエルのチラムバラムの書』(18 世紀)と『トゥシクのチラムバラムの書』(最終資料 1914 年)にある。たいへん難解な文であるが、問と答は、ミヘ・ソケ諸語の同音異義語を利用すれば解けるものがあると主張する論がある。ありえないことではないが、検討の余地がある。

ミヘ語とユカテク語は、間接構成素(副詞句)を焦点化するため動詞の前に置くと、動詞

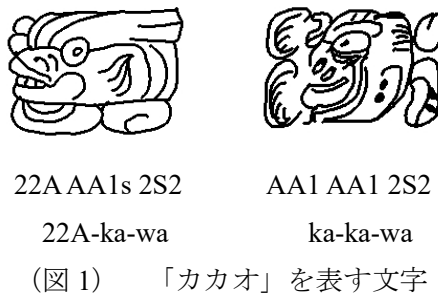
が通常とは異なる活用形となる。特殊な方策をとるこのような例は中米の他の言語にはみられない。

ミヘ・ソケ諸語とマヤ諸語は、多くの点で異なるが、マヤ諸語やマヤ文字はミヘ・ソケ諸語から影響を受けたと思われるものがみられる。オルメカからマヤへ、そしてマヤ内での変化の謎を解くには、タバスコ州とその周辺の諸言語や遺物をもっと考慮にいれなければならないだろう。

マヤ文字の繰り返し記号（22A）の機能

磯和樹（京都大学大学院）

マヤ文字資料にみられる繰り返し記号（MHD：Maya Hieroglyphic Database のカタログで 22A と採番）は、従来、その付与対象となる文字要素の音価を二度繰り返す機能を持つと考えられてきた。小点、あるいは小円が 2 つ並置されることによって表されるこの記号は、通常、対象となる文字要素の左上に付され、その対象は一要素に限定される。



22A が付与されて読まれる語には、繰り返し記号を用いない代替的な表記法も存在する。すなわち、繰り返される音価を持つ文字要素を二度用いる方法、あるいは一度のみ用いる方法である。特に、前者の表記方法の存在は、22A が繰り返しの機能を有することを示唆している。

しかし、MHD において *ma ch'ab ma ak'ab-la* 「まだ儀礼もなく、まだ闇も存在しない」と読まれる文字資料では 22A の使用例が確認される一方で、繰り返される音価を持つ文字要素を二度用いる表記例は確認されていない。



22A が付与される語において、繰り返される音は通常、*ka-ka-wa* 「カカオ」のように 1 語内に収まるのに対し、*ma ch'ab ma ak'ab-la* の場合は否定を表す機能語 *ma* の繰り返しであり、その意味上の作用範囲は単一要素に限定されず、*ch'ab* および *ak'ab-la* にまで及んでいる。このような特殊な事例においては、22A の主要な機能である繰り返しとして解釈するよりも、むしろ別の周位的機能の存在を想定すべきである。

また、22A の使用が最も多く確認される「カカオ」の表記には ka-22A-ka-wa の例が見受けられた。この場合、22A は語内部における音の反復を補助的に示す役割を果たしていると考えられる。このような用法は、ma ch'ab ma ak'ab-la をはじめとする機能語に付される場合には見られない。



AA1s 22A AA1s 2S2

(図 3) ka-22A-ka-wa の例

さらに、22A ZM1 ZYF AD1 ZA2(22A ma ch'ab ak'ab-la)においては、その 22A の位置も一般的な配置とは異なっている。仮に ma が繰り返されるのであれば、通常は ZM1 の左上に置かれるはずであるが、実際には右上に置かれている。

Mora-Marín (2024)は 22A ma ch'ab ak'ab-la について、繰り返しが隣接しない非連続的重複(non-sequential duplication)と解釈しているが、表記方法の偏りや、22A の配置が一般的な形式とは異なる点を考慮すると、22A が果たす役割が繰り返しのみとみなすことには検討の余地がある。

本発表では以上の検討を踏まえ、文字要素の配置、表記方法の偏り、ならびに 22A が用いられる並列表現の観点から、22A の機能に関する従来の理解を再考する必要性を指摘する。その上で、新たに「並列表現における文法機能の作用域の提示」という機能を提案する。さらに、この機能が内容語と機能語の関係においては機能語に、語と接辞の関係においては語に適用されることを、実例と数値データで示す。

参考文献

- Looper, Matthew G. and Martha J. Macri 1991-2025 Maya Hieroglyphic Database. Department of Art and Art History, California State University, Chico. www.mayadatabase.org [2025 年 9 月最終アクセス]
- Mora-Marín, David (2024) The duplication diacritic: A case study of variation and change in Mayan writing. *Ancient Mesoamerica*, 35(2), 562-587.

※本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものである。

D・ドゥランとA・テソソモクの史料におけるシャーマニズムの主題について

岩崎賢（神奈川大学）

本発表では 16 世紀後半にヌエバ・エスパーニャで作成された二つの文書、すなわちドミニコ会修道士のディエゴ・ドゥラン(Diego Durán)が記した『ヌエバ・エスパーニャ誌(Historia de las Indias de Nueva España e islas de la Tierra Firme)』(1581 年)と、先住民貴族の子孫であるアルバラード・テソソモク(Alvarado Tezozómoc)が記した『クロニカ・メヒカーナ(Crónica mexicana)』(1598 年)の中の記述において、いわゆるシャーマニズムと言われる宗教現象の類型の中の「脱魂型シャーマニズム」と呼ばれるもの(このタイプのシャーマニズムにおいては、シャーマンは自らの魂を肉体から分離させ、天空や地下にあるとされる異世界を訪れ、そこで超自然的存在と接触して対話や交渉などを行う)がどのように現われ出ているかについて論じたい。上述の二つの文書は、研究者によって『クロニカ X』と呼ばれる現存しないテキストをもとに記されたものとされ、スペイン人到来時にメソアメリカに広大な版図を築いていたアステカ王国(紀元 1325-1521 年)の建国と繁栄と滅亡の伝説的歴史を語るものであり、この王国の人々の宗教的な世界観を窺い知る上で第一級の価値を持つ史料である。この二つの史料の中には、脱魂型シャーマニズムに関連すると考えられる興味深い記述がいくつか認められる。メソアメリカ研究においてシャーマニズムはしばしばナワリスモと呼ばれる現象についての議論との関係において言及されてきた。「ナワリスモ nahualismo」とは、メシーカ人の言語であるナワトル語の「ナワリ nahualli」から作られた学術用語であり、この「ナワリ」は、おおよそ、メソアメリカにおけるシャーマンを指し示す言葉である。しかし、動物などに変身する魔術師についての議論であるナワリスモは、必ずしも本稿が問題とする脱魂型シャーマニズムと重なる概念ではない。というのは、脱魂型シャーマニズムの特徴の一つであるシャーマンの<魂の旅>のエピソードは、ナワリスモの<変身するシャーマン>の主題と容易に結びつき得るけれども、必ずしも前者は後者を必要とするわけではないからである。またナワリスモには当てはまらないけれども、つまり動物への変身の話は出てこないけれども、典型的には脱魂型シャーマニズムには当てはまるような事例も、二つの文書の中に見ることができる。以上のことを論じることを通して、アステカ王国の宗教伝統の一面を明らかにしたいと思う。また本発表では併せて、同じ歴史伝説的トピックについて語る際のドゥランとテソソモクの文書の語り口の違いの意味についても考えてみたい。

『クロニカ・メヒカーナ』に見るメシーカ人意識——征服戦争の記述から

井上幸孝（専修大学）

本発表では、2023 年度より実施している共同研究「史料解説に基づくアステカ王国拡張の歴史的経緯ならびに政治的・宗教的概念の解明」（科研費 基盤研究(C)、代表：岩崎賢、課題番号 23K11614）の一環として、史料の解説および日本語への翻訳作業に取り組んできた『クロニカ・メヒカーナ』（*Crónica mexicana*）において、メシーカ人としての立場や意識がどのように記述に表れているのかを検討する。

『クロニカ・メヒカーナ』は 16 世紀末にメシーカ王家の子孫であるエルナンド・デ・アルバラード・テソソモク（Hernando de Alvarado Tezozómoc）が編んだとされる文書で、いわゆるアステカ王国の中核をなしたテノチティトランのメシーカ人の歴史を記述したものである。文書はスペイン語で書かれているものの、ナワトル語の語彙が多く含まれるほか、統語や文法の面でもナワトル語の影響が大きい。16 世紀の手稿は見つかっておらず、17 世紀に作成されたと考えられる写本（アメリカ議会図書館所蔵の「クラウドス写本」）が最も古いものである。本発表の考察は、この写本に基づいた校訂版（2021 年にメキシコ国立自治大学から出版されたもの）を主に使用する。

15 世紀前半に覇権都市アスカポツァルコを滅亡に追い込み、テツココ、トラコパンとの同盟体制を確立して以降、テノチティトランは軍事力を行使して支配域を拡大していった。とりわけ、15 世紀半ば以降は急速にその版図を拡大するに至った。『クロニカ・メヒカーナ』には、この一連の拡張過程での征服戦争の詳細について多く記録されている。

本発表では、メシーカ人としての意識がどのようにテキストに表れているのかを明らかにしていく。テノチティトランによる版図拡大のための征服戦争のうち、まずメキシコ盆地内における征服に関する章の記述内容を検討する。メキシコ盆地南東部のチャルコの征服、さらにはテツココ湖内の同じ島に位置し、テノチティトラン創設後にメシーカ人の一派が分離して成立させたとされるトラテロルコの征服に関する記述を見る。次に、メキシコ盆地から離れた遠隔地での戦争について、ワステカ（クエシュテカ）地方の征服、およびソコヌスコ（ショコノチコ）地方の征服に関する章の記述を検討する。

『クロニカ・メヒカーナ』はアステカ王国期の歴史を明らかにするうえで重要な史料であるものの、表面的なスペイン語の文面を読むだけでは記録者アルバラード・テソソモクの意図は容易に解明できない。また、ナワトル語の語彙や表現を逐次検討することなしに、十分なテキストの解釈は難しい。それゆえ、征服戦争の記述を検討する中で見られた後古典期後期のメソアメリカ先住民の間での戦争に関わる概念（とりわけ予言・予兆的内容）、テキストを読み解いていく上でのスペイン語の語彙（主にスペイン植民地時代の用法との関係）について具体例を挙げ、そうした記述の体系的分析が今後の研究上の課題であることを指摘して発表の締めくくりとしたい。

参考文献

Hernando Alvarado Tezozomoc (2021) *Crónica mexicana. Manuscrito Kraus II7*. Coordinación de José Rubén Romero Galván, estudio codicológico y paleografía de Gonzalo Díaz Migoyo, con estudios de José Rubén Romero Galván, Patricia Escandón, Clementina Battcock, Rocío Cortés, Sylvie Peperstraete, Gabriel K. Kruell y Gonzalo Díaz Migoyo. México, Universidad Nacional Autónoma de México.

図像研究の可能性：BIZEN 中南米美術館・デンバー美術館収蔵のヒスイ製品

久保山和佳（東北大学 日本学術振興会特別研究員 PD）

本発表では、前 500 年～後 900 年頃のコスタリカで利用されたヒスイ製石斧型ペンダントの図像研究の可能性について発表する。コスタリカのヒスイ製品はかつてコレクション品として欧米の蒐集家の間で取引され、現在コスタリカをはじめ、アメリカ、ヨーロッパ、そして日本の博物館・美術館に収蔵されている。しかし、そのほとんどは盗掘品や個人コレクションから寄贈されたものであるため出土コンテクストが不明である。そのため、編年構築や製作における発展過程を明らかにすることが困難である。

発表者はこれまでに、実験痕跡研究や RTI 観察など、遺物の細部に特化した研究を行ってきたが、これまで彫刻のモデルとなった人物や動物、紋様などの図像にはあまり目を向けてこなかった。石斧型ペンダントの図像は非常に多様であり、ヒト型のペンダントに至っては頭飾りやボディペイントの違い、性差を確認することができる。また、道具を持つ工人や、動物に変身したと思われる人物、メソアメリカ的要素を持つ人物表現などが見られる。その豊富な史料数と多様な彫刻スタイルは、図像研究によってペンダントの社会的意味の解明に活かせるのではないだろうか。

石斧型ペンダントは、それぞれの博物館で登録名称が異なっていたり、出自が分からないことからオルメカの遺物として誤って登録されていたりと、コスタリカ国外での認知度が低く、展示されずに倉庫に眠っていることがある。そのため発表者は現在、世界中に散らばる石斧型ペンダントを一括にまとめたデータベースの作成を試みている。その一環として、2025 年 4～5 月にデンバー美術館と BIZEN 中南米美術館において遺物分析を実施した。本発表では、これまでの分析結果を踏まえ、当該ペンダントの図像研究の第一歩として、彫刻された人物像と紋様に特化した考察をまとめる。

チャルチュアパ遺跡の都市化について

伊藤伸幸（名古屋大学）

メソアメリカ南東部太平洋側地方の主要遺跡チャルチュアパの調査（2020-2025）では、都市空間創成史の再構成を目標とした。遺跡とその周辺の考古学調査で得られた層位学的な資料と自然地理学的調査成果を基に、都市景観を形成する以前の自然景観の復元を目指した。

この目的を達成するため、以下の課題を設定した。

- (1) ヒトがやってきた当時の自然景観の復元
- (2) チャルチュアパ遺跡における都市景観形成過程の解明
- (3) 都市景観創成と天文観測との関係の解明

以上の課題を解決し、メソアメリカにおける都市空間の創成過程を、チャルチュアパ遺跡を対象として復元し、古代メソアメリカ都市景観の創成とその発展史をまとめることとした。チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区の発掘と周辺の自然地理学・地質学的調査を実施し、先古典期中期の建造物建設よりも前の時期もしくはその時期の原風景となる自然景観を復元し、その原風景にモニュメンタルな建築や石彫などが追加されて、どのように都市景観が形成されたのかを解明する。

エル・トラピチェ地区では、モニュメンタルな建造物建造の開始時期を解明するために、エルサルバドル最大の建造物 E3-1 を発掘調査した。カサ・ブランカ地区では、北のエル・トラピチェ地区から広がった都市景観の拡大がいつの時期から始まったのかを解明するため、「大基壇」北端の部分にトレンチをいれて、発掘調査を実施した。

チャルチュアパ遺跡発掘調査からみた都市の創成過程と巨大建造物の建設を復元すると、最も北に位置するエル・トラピチェ地区では、先古典期中期末～先古典期後期初めに突如最大の神殿ピラミッド（E3-1）が建設され、この建造物の南に聖域を設けた。先古典期後期には、都市域を南約 1km のカサ・ブランカ地区まで延し、自然地形を改変して「大基壇」（約 220×240m）を造成した。その上には 7 基以上の神殿ピラミッドを建設した。また、エル・トラピチェ地区でも E3-1 の南に神殿ピラミッド 2 基以上を建設した。

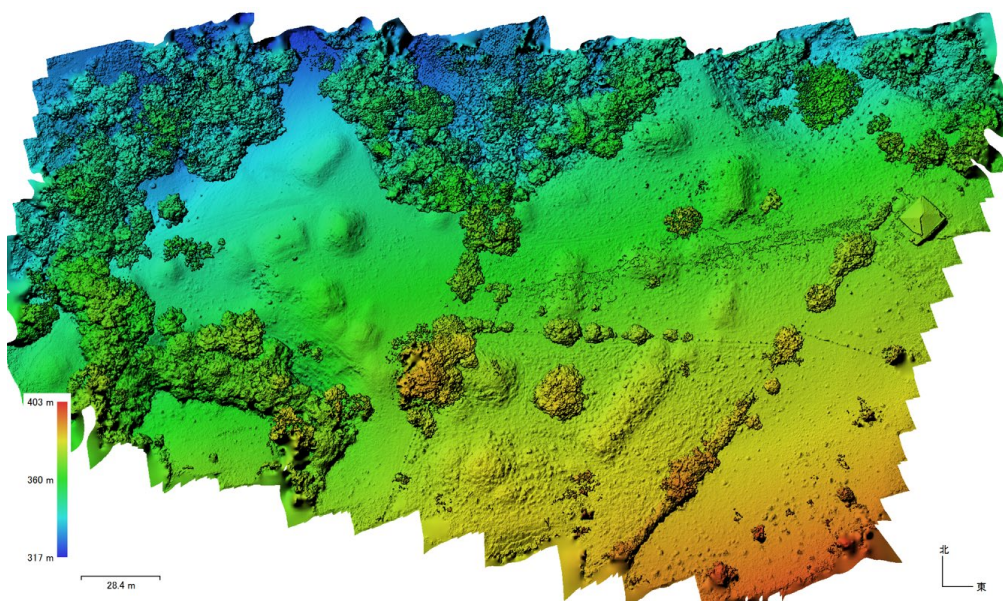
この発表では、チャルチュアパ遺跡全域の都市化の過程を考察する。

ホンジュラス、キミスタン谷の調査ーラ・コロサ遺跡ー

寺崎秀一郎（早稲田大学）

キミスタン谷は、ホンジュラス共和国サンタ・バルバラ県に所在し、行政上の中心地キミスタン市はサンペドロスーラとグアテマラ、エルサルバドル方面を結ぶ CA 4 道路沿いに位置する。その西半は中村誠一氏他のラ・エントラーダ考古学プロジェクトにおいてカバーされ、東側のナコ谷は、E.ショートマン、P.アーバン両氏によるナコ谷考古学プロジェクトによって調査されてきた。しかし、キミスタン谷の東半部は考古学的空白地帯となっていた。2024 年 9 月、キミスタン市市長ルーベン・ダリオ・パチェコ・ペレイラ氏からの情報で複数の遺跡の存在が指摘されたことから、ロス・メタテス遺跡、ラ・コロサ遺跡、ウラコ・カマロテ遺跡の巡検をおこなう機会を得た。さらに、同年 11 月にはホンジュラス国立人類学歴史学研究所によって、当該地域の踏査が実施され、グアテマラとの国境近くにも遺跡が存在することも確認されている。

キミスタン谷の調査によって、考古学的な空白地帯を埋め、マヤ文化圏と非マヤ文化圏の交流実態をより明確にすることが見込まれる。とりわけ、今回の調査によって、キミスタン谷には複数の大理石産地があることも確認された。大理石製容器は非マヤ文化圏からマヤ文化圏にもたらされたものとされており、今まではスーラ谷のトラベシーア遺跡周辺がその産地と考えられてきたが、複数の大理石産地を擁するキミスタン谷の存在は従来の定説を再考する契機となり得るだろう。そのためにもキミスタン谷の主要な遺跡の分布、測量は急務であり、2025 年の調査においては、比較的アクセスが容易で、遺跡の状況が把握しやすいラ・コロサ遺跡を対象として選定し、UAV による 3 次元測量をおこない、下図のような成果を得た。



ラ・コロサ遺跡中心グループ DEM

ホンジュラスのマヤ文明世界遺産「コパンのマヤ遺跡」における最新調査成果報告

中村誠一（公立小松大学）

本発表では、マヤ文明古典期を代表する世界遺産であるホンジュラスのコパンのマヤ遺跡における最新の調査動向と自身のプロジェクトの最新調査成果を報告する。

調査動向としては、マヤ地域における一般的な傾向であると見受けられるが、特にホンジュラスのコパンでは、アメリカのトランプ政権発足以来、ハーバード大学をはじめとするアメリカ調査隊の勢いが感じられない。一方で、2022 年の国交成立以前からコパン遺跡で考古学調査を実施していた中国隊（中国社会科学院考古学研究所）も、未だに考古学調査を再開する気配がなく、本年 11 月 30 日に行われるホンジュラスの大統領選挙の結果を見てから、調査を継続するか否か、態度を決めようとしている可能性がある。このように、マヤ文明研究を現在の政治情勢と切り離すことが難しいアメリカや中国と比べて、我々日本人調査員は恵まれており、ホンジュラス政府と 2027 年まで一般交流協定に加え、遺跡中心部複数建造物の共同調査研究協定を締結している公立小松大学が後ろ盾になることによって、内外を問わず他大学の研究者も自由にコパン遺跡の調査研究、資料分析の許可を得ることが出来ている。

その中で、本発表では、特に、科研費の基盤研究（S）および挑戦的研究（開拓）で実施した文理医融合研究による調査研究成果について説明する。基盤研究は、金沢大学、名古屋大学およびダブリン大学所属研究者との共同研究であり、挑戦的研究は、名古屋大学所属研究者との共同研究である。また同時に、ノンプロ見返り資金を中心とした外部資金により、これまで地道に続けてきた発掘調査・修復保全活動によって、昨年の 3 月にコパンでは 36 年ぶりに発見された石碑 64 の持つ意味について、さらに、建造物 10L-7 の発掘調査から強く示唆されているコパン王朝末期の新しい歴史について、これまでの調査史や定説と比較しながら、データに基づいた新しい仮説を提示する。

アンデス形成期のフロンティアにおける地域間交流

山本睦（山形大学）

オスカル・アリアス（テュレーン大学）

ペルー最北部とエクアドル南部は、従来、アンデス形成期（前 3000 年～紀元前後）において、中央アンデスと北部アンデスという二つの文化圏の境界あるいは周縁とみなされてきた。しかし近年の研究により、当該地域の社会は、単なる文化圏間の架橋的存在にとどまらず、両文化圏の社会変化に能動的に関与したことが示されるようになった。また、これらの地域の社会が内部に多様性を持ちながらも、地域間交流を基盤として独自の文化を形成していたことも次第に明らかになりつつある。

発表者らはこうした認識に立ち、当該地域を異なる文化圏が重なりあう能動的な主体、つまりはフロンティアとして捉えることで、異文化圏間交流を社会変化のプロセスに包括的に位置づけることを目的に調査を進めてきた。具体的な調査内容としては、①ペルー最北部ハエン地方ワンカバンバ川流域の踏査および同地方最大規模のインガタンボ神殿遺跡の発掘、②エクアドル南部山地のセロ・ナリオ遺跡の発掘とマラカト市近郊の踏査、③ハエン地方東部トゥルコ遺跡などの踏査・発掘、があげられる。

これらの成果は、ペルー最北部とエクアドル南部の形成期研究のボトムアップに寄与しただけでなく、先行研究で想定されてきた当該地域社会間の交流について、再検討の余地があることを示した。とくに、形成期早期（前 3000 年～前 1500 年）および形成期中期から後期（前 1200 年～前 250 年）におけるエクアドル南部とハエン地方との関係は、交流ルートや当時の社会的状況をふまえたうえで、再考する必要がある。

そこで本発表では、発掘および踏査から得られたデータに基づき、形成期における地域間交流ルートを仮説的に復元し、その時期的変遷とアンデス形成期の社会変化との関連について検討する。具体的には、形成期中期以降の主要交流ルートの一つが、エクアドル南部山地カタマヨとペルー最北部海岸セロ・ニャニャニケを結ぶ山間部、さらにハエン地方西部とインガタンボをつなぐ地域に存在し、当該地域社会間の交流の様態が時期ごとに变化していた可能性について論じる。

ビルカバンバ地方のインカ道について

渡部森哉（南山大学）

インカ帝国は首都クスコを中心に後 15-16 世紀にアンデス地方に台頭した。全土にインカ道を敷設し、地方行政のためにタンブと呼ばれる行政センターを設置し、インフラを整備した。

発表者は 2002 年にペルーとエクアドルとの国境付近にあるアイパテ遺跡から行政センターのあるカハマルカまで 20 日間かけて踏査した。その後もインカ道を少しずつ踏査した。今回 2025 年 7 月に、クスコの北にあるビルカバンバ地方のインカ道を踏査する機会を得た。その報告を行う。

インカ帝国は、アタワルパが捕縛された 1532 年、あるいはスペイン人がクスコに入城した 1533 年に滅びたと語られる。しかしながら、マンコ・インカが反乱を起こし、インカの末裔はビルカバンバ地方に移動し、そこで抵抗運動を続けた。抵抗の主体はサイリ・トゥパク、ティトゥクシ・ユパンギ、トゥパク・アマルーと移り変わり、1572 年に終わった。

ビルカバンバ地方については、スペイン人側からの記述が多く残されており、また、マチュピチュ、チョケキラオをはじめとする有名な遺跡の存在がハイラム・ビンガムによって報告された。現在では、記録文書に出てくるビトコス・ロサス・パタ遺跡、ビルカバンバはエスピリトゥ・パンパ遺跡と同定されている。今回は南から北に向かい、ロサス・パタ遺跡からエスピリトゥ・パンパまで 5 日間をかけて踏査した。現在北と南の両方から車道の建設が進んでおり、インカ道のかなりの部分が破壊されている。

ペルー北部においては、行政センターやタンブがインカ道沿いにいくつか確認されたが、ビルカバンバ地方においては、間にタンブと考えられる明確な痕跡は確認できなかった。この地域の特殊性を示している。それは、地方行政で支配する人間集団がいなかったからなのか、あるいは、スペイン人から逃げるためにむしろそうした場をあえて建設しなかったからなど、いくつかの理由が考えられる。マチュピチュまではパチャクティの王領と解釈され、インカ道によって複数の遺跡が結びついているがそれとは異なったパターンである。王領ではない遺跡群をどのように性格付けするのか、インカ考古学の課題である。

圧痕レプリカ法によるクントゥル・ワシ遺跡出土土器の分析

荘司一歩（山形大学）

井口欣也（埼玉大学）

ビクトル・バスケス（アルケオビオス）

テレサ・ロサーレス（トルヒーヨ大学）

圧痕レプリカ法とは、種実や昆虫などの様々な物質が土器製作の過程で混入・圧着しすることで「圧痕」として残された混入物の表面形状をシリコン樹脂で型取りし観察する方法である（丑野・田川 1991）。日本国内で開発された圧痕レプリカ法は、土器に残された栽培植物の種実圧痕の研究を中心に、有機物の遺存が極めてまれな日本において、栽培植物の伝播と受容を語る上で欠かせない分析方法として地位を確立させてきた。こうした分析技法は、東アジアにおいて応用された事例が増えつつあるものの、それらを除いた日本国外における応用事例は限られている。その要因として、植物資料の残存状況が比較的良好な地域では、同手法に頼ることなく植物利用を議論できる点があげられる。しかし、そうした地域においても、検出の難しい微細な植物種子の同定や土器製作が行われたミクロな生態環境を復元するうえで、圧痕レプリカ法は有効な手法となる可能性を秘めている。

本発表では、クントゥル・ワシ遺跡を例として、圧痕レプリカ法による分析結果を報告する。分析の対象となったのは、2012 年と 2013 年の発掘調査で出土したすべての土器破片、および 1988 年～2002 年の発掘調査により出土した土器破片資料から抽出した土器タイプサンプルである。計 420kg の土器片を調査し、220 点のレプリカ製作と顕微鏡観察を行った結果、計 93 点の植物種子および昆虫類の圧痕を検出した。種同定分析の結果、畑地や荒地などの、人為的な攪乱環境に生息するようなイネ科、カヤツリグサ科、トウダイグサ科の草本植物に加え、ヒユ科のキヌア（図 1）、バラ科のキイチゴ属（図 2）などの食用植物が検出された。とくにキヌアについては、検出数の通時的な変化などがうかがえるなど、植物利用や土器製作環境の変化を示唆する有益な基礎データが得られた。

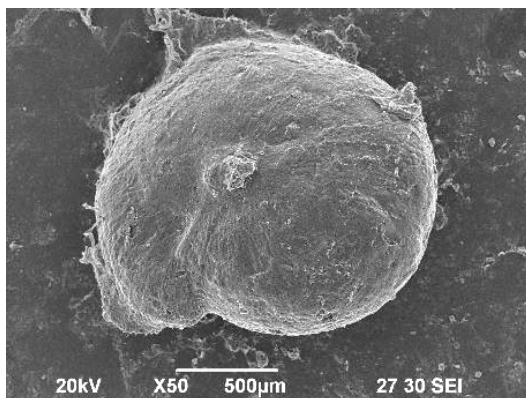


図1 キヌア (*Chenopodium quinoa*)
の圧痕レプリカ(撮影: 荘司)

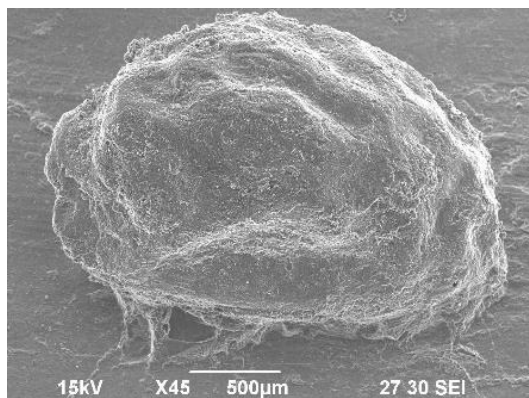


図2 キイチゴ属 (*Rubus* sp.)
の圧痕レプリカ(撮影: 荘司)

古代アンデス染織品の染料分析

浅見恵理（埼玉大学）

西澤弘恵（東京大学）

金崎由布子（東京大学総合研究博物館）

大崎綾子（女子美術大学）

瀬川かおり（女子美術大学）

本研究の目的は、古代アンデスの染織品に使われた染料の特定である。古代の染織品は主に天然染料が使用され、赤色と青色は研究の進展により原材料が特定されている。特に、赤色のコチニール染料、青色の藍染料が知られている。中央アンデスで織物の出現は紀元前 2500 年頃と推定され、木綿やその他の植物繊維で原始的な布が製作された。形成期の彩色は、タンニン酸系と鉄塩で茶の濃淡を表した例や、貝紫や顔料である辰砂（硫化水銀）の使用による赤色系の例がある。染料は木綿より獣毛（ラクダ科動物の毛）によく染まるため、赤色系は、パラカス文化以降（紀元前 7 世紀頃）、獣毛利用の開始に伴いコチニール染料が主流となったと推測されている。

今回、東京大学総合研究博物館が所蔵する染織品 5 点を対象に、染料分析を行った。分析方法は、非破壊検査法の 1 つである分光反射分析である。分析資料は、時期と地域が異なるものを選定し、古代アンデスにおける赤色と青色の染料の利用実態を把握することを目的とした。その結果、赤色系はコチニール染料、青色系は藍染料と推定された。

重要な成果として、形成期のラス・アルダス遺跡で収集された染織品の分析結果が挙げられる。経緯糸は木綿で、くすんだピンク色の糸による刺繍によりネコ科動物が表現されている。部分的に、経糸に木綿繊維が巻き付けられており、非常に稀な技法が用いられている資料である。他の博物館所蔵の類似例を参考にすると、辰砂と貝紫による彩色が推測されている。そのため、本資料も顔料の使用が推測されたが、分析の結果、コチニール染料の可能性が高いことが分かった。

この結果に加えて、ナスカ文化のカワチ遺跡で収集された織物についても、ピンク色の木綿糸にコチニール染料が使用された可能性が高いことが判明した。

どちらの資料も媒染剤は不明であるものの、木綿の染色にコチニール染料が使用されたことが推測され、古代アンデスの染色技術の発展を考えるうえで貴重な成果となった。

遺産と社会的記憶

—ペルー・カハマルカ州パコパンパ村における考古遺産と無形文化遺産の統合戦略—

サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ（立命館大学）

関雄二（国立民族学博物館）

ペルーのような国には数多くの遺跡が存在するものの、その保護と維持管理には十分な国家予算が割り当てられていない。遺跡を「文化遺産」に指定することは法的枠組みを与える点で意義があるが、実際にはそれだけでは保護に不十分である。したがって、遺跡の保護は当局のみならず、周辺住民の積極的な関与を必要とする課題となる。しかし、その参加の度合いは、住民が遺跡についてどの程度の知識を持ち、それを地域アイデンティティの象徴、観光資源、教育資源など、いかなる価値として認識しているかに大きく左右される。価値の種類が多様であるほど、住民による遺跡保護への関心と関与が高まる可能性がある。ここで問題となるのは、観光資源としての価値に偏りがちな遺跡の評価を、いかに多面的に広げることかという点である。

こうした背景のもと、パコパンパ考古学プロジェクトは地元住民が考古遺産を主体的に活用することを促す活動を展開してきた。パコパンパ遺跡および周辺遺跡における 20 年以上の継続的な調査と保存・活用の経験を踏まえ、プロジェクトは遺跡の重要性に加え、町の習慣や伝統についても訪問者が学べる「史料館」の設立を提案した。これにより、考古学的遺産とパコパンパの無形文化遺産との統合が図られることになる。

さらに、地元の習慣や伝統に関する知識を収集し、住民自身が訪問者への情報発信に積極的に関わるよう促進するため、2017 年から観光資源化プロジェクトを実施してきた。ワークショップ、インタビュー、視聴覚資料の収集を通じて、住民によるテーマ別委員会の組織化を支援し、各分野において地域住民が自ら専門性を発揮できる体制を整えた。その成果として、地域文化に関する重要な情報が体系的に収集されただけでなく、パコパンパ村における社会的アクターの特定と統合も可能となった。

本発表は、これらの取り組みの成果を、直面した課題および提起された解決策を踏まえて報告する。さらに、当該プロジェクトが地域社会の多様な関係者に及ぼす影響について、各アクターのニーズと提案内容に言及しつつ検討を行う。加えて、社会的記憶の概念を基盤として、考古遺産と他の文化遺産との連関の可能性についても議論する。

2025 年度ペルー北部ワカ・ブラバ遺跡発掘調査速報

手嶋啓仁（埼玉大学）、
ルイス・アルベルト・レイムンド・ルメ（ペルー国立サン・マルコス大学）

本発表では 2025 年 9 月 11 日～から 10 月 25 日にかけて、ペルー共和国北部ワカ・ブラバ遺跡で行った発掘調査について、その概要及び 11 月末時点での分析の総括を報告する。ワカ・ブラバ遺跡はペルー共和国北部ヘケテペケ川上中流の境界域にある形成期の祭祀センターと考えられる遺跡である。ヘケテペケ川、サン・パブロ川、ウェルタス川の合流地点を東に約 3km、ヘケテペケ川を臨む南岸の小高い丘の頂上部に位置する。このような立地にあることから、ヘケテペケ川中流域以下と上流域の河川を基盤とした交流を考えた場合、重要な位置を占めていた可能性がある。

今年度の発掘調査では、ワカ・ブラバ遺跡の編年など基礎データを構築することを目標としている。そのために本調査では土器観察、層位観察を目的として表面土器を比較的多く確認できた区域に 4 つの 2m×2m の試掘坑を設定した。さらに建築フェイズの確認のため、基壇と広場を含んだ 2m×10m のトレンチを発掘区として 1 つ設定した。これらの発掘区のうち試掘区を 2 つ(U1, U2)、トレンチ発掘区(U5)を 1 つ、合計 3 区画を約 5 週間かけて発掘を行った。

試掘区 U1 では、埋めた際に倒壊したと思われる泥壁が出土しその構造についても確認することができた。また泥壁の基礎は本来の位置に残っており、それに接着するように石列とそれに囲まれていると考えられる床面が見つかった。U2 では出入口と思われる切られた箇所のある石壁が見つかった。また両試掘区ともに土器がある程度出ており、おおよそ形成期中期の中流域と類似していると思われる。またそのほか出土遺物についても中流域や上流域との結びつきを示唆するものが含まれていた。

トレンチ発掘区 U5 では基壇と広場の建築フェイズについて少なくとも 2 時期あることが地層の観察から明らかとなった。土器はほとんど出土していないが、焦げ跡と炭が基壇上と広場から大量に出土しており、火を用いた活動が活発に行われていたと考えられる。

アンカシュ県北部におけるレクワイ期およびワリ期の遺跡分布と遺構・遺物に関する報告

吉川主浩（南山大学）

ワリ国家（紀元後 700～1000 年）は、ペルー中央高地南部のアヤクーチョ盆地を中心に、ペルーの高地部および海岸部一帯に広範な影響を及ぼした。ワリ国家の拡大が、各地域の社会にどのような影響を与え、それらの社会がいかに持続または変容したのかという点は、ワリ研究における主要なテーマの 1 つである。

ペルー北部アンカシュ県では、レクワイ社会（紀元後 200～700 年）が広く展開していた。レクワイ社会は紀元後 700 年頃に崩壊するが、ワリ国家による行政施設・倉庫・段々畑・道路遺構といった直接支配の証拠は乏しく、ワリ国家の拡大後も一定期間存続していた。そのため、レクワイ社会の終焉はワリによる征服の結果ではなく、外圧を受けながら生じた自律的な変容と崩壊の過程として捉えられている。一方で、レクワイ文化の最終段階に現れるチュルパからは、多くのワリ文化の図像表現を伴う土器が発見されており、ワリ国家と在地エリートとの強い交流が示唆されている。アンデスにおける広域国家形成や、地域社会による柔軟な対応を明らかにするためにも、両社会の関係性やレクワイ社会の変容・崩壊の過程についての研究が求められている。

発表者は、過去にワリ文化の図像表現を伴う土器片が報告されていたアンカシュ県北部、特にコロongo郡およびワイラス郡において、2024 年 7～8 月に第 1 次踏査、2025 年 9～10 月に第 2 次踏査を実施した。本発表では踏査の成果に基づき、次の点について報告する。①レクワイ期とワリ期における遺跡分布、遺構・遺物の特徴の比較、②ワリ期のチュルパの分布および特徴の概要。③レクワイ文化とワリ文化の交流が起きたと考えられる移行期の遺物の報告。

これらの成果は、今後実施予定の発掘調査に先立つ基礎的な研究として、またワリ帝国とレクワイ社会の関係性を考察する上で重要な手がかりとなると考えられる。

ペルー北部ヘケテペケ川における地形形成作用と文明形成期の土地利用に関する調査

鶴見英成（放送大学）

荏谷愛彦（専修大学）

縫村崇行（専修大学）

大谷博則（有限責任個人企業 Otani Hironori E.I.R.L.）

カルロス・モラレス（ペルー文化省）

大規模公共建造物が中央アンデス地域の広範囲・長期間に及んで築造されたことは、アンデス文明の大きな特徴の一つである。その起源だと考えられるのは、現在のペルー共和国北部にて、紀元前 3000 年ころより多数建造されるようになった壮麗な神殿建築群である。なぜ中央アンデス地域の居住者たちは建設活動に大きく注力したのか、という根源的な問いに取り組むにあたって、特にその草創期の事例を主たる分析対象とすることにより、いかなる自然環境や社会的要請のもとに大規模公共建造物は成立したのか、その背景を解明することが期待できる。

そのような課題のもと鶴見は 2003 年より、モラレス・大谷と連携しながら、ヘケテペケ川中流域に多数分布する神殿遺跡群の調査を重ねてきた。その過程において、神殿が機能していた当時によろどのように水資源を利用できたか、また自然災害によろどのように対処したかなど、自然環境と居住者の相互作用をなるべく具体的に解明する必要があると考え、2024 年より地理学を専門とする荏谷・縫村と共に現行のプロジェクトを開始した。

本発表ではこの目的に即して、2024～25 年に踏査した文明形成期の神殿遺跡群（主として紀元前 1900～前 500 年に対応）に関して得られた知見を示す。具体的な事例としては、ラス・ワカス遺跡において神殿建築が土石流災害を受けたこと、ポルボリン遺跡では神殿建築の一環として土石流対策の石造構造物が建造されたことなど、様々な仮説を立てることができた。それらの仮説を検証すべく、踏査と並行して測量を実施し、建築と周辺地形の詳細なデータを取得した。また踏査を通じて、人類の居住開始以前から現在に至る長期的な地形形成作用に着眼することで、アンデス文明における土地利用の特徴をより精緻に説明できるのではないか、というさらなる課題を見いだしたが、この点についても現時点での見通しを提示する。

ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡における儀礼的コンテキストと動物利用

— 2012 年発掘資料の予備調査 —

清家大樹（聖マリアンナ医科大学）

渡部森哉（南山大学）

本発表は、ペルー北部高地に位置するエル・パラシオ遺跡（800～1000 年）における動物考古学的調査の速報である。エル・パラシオはワリ帝国（600～1000 年）の北部高地における行政センターであり、その宗教的・政治的機能を理解する上で重要な資料を提供する。発表者はこれまで 2008 年および 2010 年の発掘資料を分析し、同遺跡における動物利用の様相を検討してきた。今回は新たに 2012 年に発掘が行われた B2 区の儀礼的コンテキストが確認された空間から出土した動物骨資料を主な対象とし、予備的な検討を行った。

調査方法については、出土した動物骨資料を対象に形態的特徴の観察を進め、種を同定し、解体痕などの骨に見られる特徴について記録を行った。これまでの観察では、南米ラクダ科動物が多数を占める傾向が確認されており、一部には解体痕が認められている。ペルー中央高地のフニン高原などアンデス地域で独自に家畜化された南米ラクダ科動物は、現代では荷駄利用や獣毛利用など二次的な利用が主で食用は限定的である。しかし、先スペイン期の遺跡から出土する骨にはしばしば解体痕が認められる。また、ラクダ科家畜は豊穰と繁栄の象徴とされ、犠牲として供されるほか、儀礼に伴う饗宴で食されることも知られている。今回の資料は、こうした利用形態の一端をうかがわせるが、詳細は今後の検討を要する。また、少数ながらシカや大型ネコ科動物、クイなど他の動物も含まれており、それらの動物が果たした役割について考えることも重要であり、今後の分析対象となる。

これらの知見は、2008 年・2010 年発掘資料の分析で示された動物利用の傾向と照合することで、エル・パラシオ遺跡における動物利用の変化や儀礼上の位置づけを考察するための材料となる。本発表では、これらの知見を踏まえ、エル・パラシオ遺跡における儀礼的コンテキストが確認された空間における動物利用について速報的に報告する。

ペルー天野プレコロンビアン織物博物館資料に基づく笛吹きボトルのタイプ分類再考

吉田晃章（東海大学文学部）

真世土マウ（岡山県立大学）

鶴見英成（放送大学教養学部）

森下矢須之（BIZEN 中南米美術館）

発表者らはこれまで、BIZEN 中南米美術館、東海大学文明研究所、倉敷考古館などに所蔵される笛吹きボトルを対象に、器形・装飾・音響構造の分析を通じて、制作者の意図を反映したタイプ分類を試みてきた。また、先スペイン期アンデス地域、特にペルーにおける諸文化の聴覚的志向性および通時的変遷についても、認知考古学的観点から検討を進めてきた。しかしながら、国内資料群は点数・文化的多様性の両面において限界があり、既存のタイプ分類の妥当性を検証するには、より広範な資料群との比較が不可欠であった。

この課題に対応するため、2025 年 2 月にペルー・リマ市に所在する天野プレコロンビアン織物博物館（以下、天野博物館）にて現地調査を実施した。同館は現在、織物を中心とした展示構成を採るが、初代館長・天野芳太郎氏によって収集されたチャンカイ文化を中心とする土器類が多数所蔵されており、笛吹きボトルに関しても 127 点が確認された。これは東海大学文明研究所所蔵資料の倍以上に相当し、国内資料群の補完に資する重要なコレクションである。

調査では、iPad 用アプリ Scaniverse（Niantic 社）を用いて各資料の三次元形状を記録し、外部形状のデジタルアーカイブ化を行った。X 線 CT による内部構造の解析は行っていないが、笛玉の位置や共鳴室の有無、胴部の形態などから、既存分類との比較検討は十分に可能である。また、吹奏法に基づく音響特性の記録も併せて実施し、音色の分析に資するデータを取得した。

調査の結果、国内では未確認の大型器、吹奏時に笛玉付近を手指で制御することで音色の変化を可能にしたと推定される器、さらには九つの胴部を持つ複雑な構造を持つ多胴器など、多様な形態的・機能的特徴を有する笛吹きボトルが複数確認された。これにより、天野博物館所蔵資料の文化的・技術的特性が明らかとなり、国内資料との比較を通じて、笛吹きボトルのタイプ分類の再構築に向けた新たな視座が得られた。

本ポスター発表では、これらの調査概要および得られた知見を報告し、今後の笛吹きボトルに関する認知考古学的研究の展望についても言及する。

笛吹きボトル
（左より）ピクス文化、
レクワイ文化、
ワリ文化
（東海大学文明研究所
所蔵）



笛吹きボトルの形態と音色の変化に関する比較研究：エクアドル資料調査を中心に

真世土マウ（岡山県立大学）

吉田晃章（東海大学文学部）

鶴見英成（放送大学教養学部）

森下矢須之（BIZEN中南米美術館）

笛吹きボトルとは、ホイッスル（笛玉）を備え、土器内部で水と空気が移動する際に音が鳴る、内部構造の比較的複雑な土器である。発表者らはこれまで、東海大学文明研究所およびBIZEN中南米美術館が所蔵するペルー産笛吹きボトルを中心に、X線CTによる内部構造の観察を通して、制作工程や工人の意図に基づく型式分類を行ってきた。しかし笛吹きボトルは、バルディビアに始まり長い土器文化の歴史を有するエクアドルでも約1500年にわたり形態や用途を変化させており、その研究も進められている。したがって、笛吹きボトル研究においてエクアドルは欠かせない地域である。2025年8月には首都キトで資料調査を実施した。南部グアヤキルにも資料は多いが、エクアドル各地の文化を代表する典型的な笛吹きボトルは首都の博物館群に集中していると考え、キト所在の諸機関を対象とした。具体的には、エクアドル国立博物館、文化遺産省収蔵庫、サルドゥンビデ・ロサレス財団、エクアドルカトリック司教大学内ヴァイルバウアー考古学・ハシント・ヒホナーカアマニョ博物館、カサ・デル・アラバド先プレコロンブス美術館に所蔵される約90点の笛吹きボトルをScaniverse（Niantic社）で三次元計測した。

まず、これらを対象にエクアドル各地、各時代の文化における形態的特徴を再考したい。さらに従来、発表者らが研究してきたペルー産笛吹きボトルとの比較を通じて、各文化の特徴がより明確に浮かび上がってきたため、先行研究と照らし再検討を行う。加えて、エクアドル地域産の笛吹きボトルが日本国内のコレクションにも複数確認されており、それらを併せて調査・記録することで、国全体としての比較の可能性について、より明確で包括的な視野を得ることができる。

なお、エクアドルにおける笛吹きボトルの音色および形態の変化は、制作工程や工人、さらには社会状況の変化とも密接に関係していると考えられる。最後に、エクアドルとペルーにおける笛吹きボトルの形態および音色の変化の差異が何を示しているのかについて検討を試みる。



（左より）

2点チョレーラ文化、

1点ハマ・コアケ文化

BIZEN 中南米美術館収蔵

古代アメリカ 文明のマンガ的想像力 ～メソアメリカ編

小林貴徳（専修大学）

宮野元太郎（東亜大学）

古代メソアメリカは日本人にどのような世界として想像されてきたのだろうか。たしかに、メソアメリカ文明といえば、アンデス文明と同じく日本ではまだあまりよく知られておらず、「謎」「神秘」といった不思議イメージが先行しているという一面もあるだろう。本研究は、日本のポピュラーカルチャーのなかで古代メソアメリカがどのように描かれ、一般社会にどのような不思議イメージが流布してきたのか探るものである。具体的には、わが国を代表するポピュラーカルチャーであるマンガ、とりわけストーリーマンガに注目し、各作品に描かれるメソアメリカのすがたを検証する。

ストーリーマンガの祖といわれる手塚治虫以降、マンガ産業は飛躍的な発展を遂げた。幾度のブームを経てジャンルやテーマを多様化させつつ読者層や市場を拡大させてきたが、ストーリーマンガはつねにその主役だった。本研究では、おもに 20 世紀後半の作品に焦点を絞り、古代メソアメリカの要素をモチーフとした（と思われる）ストーリーマンガ作品について年代ごとに提示し、その描写や舞台のモデル、ストーリーとの関連性や傾向について検討を図る。それぞれの作品が世に出された時代の社会的背景を踏まえつつ、メソアメリカの不思議イメージがどのような時代潮流のなかで形成されたのか明らかにする。

なお、本研究では、マンガを子ども向け、あるいは少年・少女向けの娯楽メディアとして放っておくのではなく、学びの動機付けになりうる教育資源として扱う。学習の機会は何にも学校教育の場のみにあるのではない。マンガという身近なメディアには、読者の知的好奇心を刺激し、学びへと誘う可能性が秘められているはずである。メソアメリカが描かれたマンガ作品を検証し、できるだけ学びに結びつくかたちに整理すること、それが本研究の意義である。

古代アメリカ 文明のマンガ的想像力 ～アンデス編

宮野元太郎（東亜大学）

小林貴徳（専修大学）

本研究は、日本のマンガ作品における古代アンデス文明の描写を分析し、そのイメージ形成の過程と社会的影響を明らかにすることを目的とする。古代アンデス文明は、日本社会においては高校教科書に数ページ触れられるに過ぎず、その認知度は高いとはいえない。しかし大衆メディア、とりわけマンガの中では、黄金郷や宇宙人といった要素と結びつき、しばしば非現実的に再解釈されてきた。こうした描写は一時的な娯楽表現にとどまらず、繰り返し再参照されることで文化的記号として定着し、日本人のアンデス文明像の形成に寄与してきたと考えられる。

この研究の意義は三点ある。第一に、考古学研究成果の社会還元の観点から、マンガという大衆メディアが研究知識の伝達や誤解の温床としてどのように機能してきたかを明らかにする点である。第二に、エンターテインメント作品が次世代研究者の関心を喚起し得る可能性をもつ点である。『インディ・ジョーンズ』や『マスター・キートン』が考古学者像を形成した事例はその典型である。第三に、文化人類学的観点から、フィクションを通じた文明イメージの形成と再生産のメカニズムを検討する点である。

本研究では、1960 年代から 2000 年代に刊行された約 40 作品を対象に、描写の特徴と変遷を整理する。各作品の社会的背景やマンガ史における位置づけを踏まえた上で、作品に登場する考古学的要素を抽出し、神秘性・理想郷・財宝・自己啓発・文明崩壊・西欧文明との接触といったテーマ別に類型化した。その結果、ナスカの地上絵やインカ帝国の滅亡など、一部のモチーフが反復的に利用され、文化的なステレオタイプとして強化されている傾向が確認された。

本発表では、これらの分析を通じて、日本のマンガが古代アンデス文明をどのように描き、日本社会にどのような文化的イメージを浸透させてきたのかを報告する。併せて、今後のパブリック考古学研究における課題と展望についても検討する。

中米・エルサルバドルのウスルタン様式土器に含まれる火山ガラス

北村繁（新潟大学）

村野正景（静岡大学）

市川彰（国立民族学博物館）

火山地域で製作される土器は、坏土に含まれている風化火山灰や土器製作の過程で添加された火山灰（テフラ）の粒子を含む場合が少なくない。そのため、土器胎土中の火山灰粒子の起源を明らかにすることで、土器の生産地や製作方法など、考古学的に重要な知見が得られる可能性が大きい。火山灰粒子の起源となるテフラ層を特定するには、波長分散型X線マイクロアナライザー（WDS）を用いて化学組成を分析し、既存のテフラの分析値と比較するのが最も有効である。柴（2014）や関根ほか（2018）では、こうした方法で、北日本の縄文土器について、土器の製作地や土器の移動を明らかにしている。

本研究では、①中米エルサルバドル西部のチャルチュアパ遺跡で出土したウスルタン様式土器の土器片 2 片、および、②エルサルバドル東部海岸に近いヌエバ・エスペランサ遺跡で出土した製塩土器の土器片 2 片について、上記の分析を行い、その製作方法や生産地を考察した結果を報告する。なお、分析には、弘前大学理工学部共用機器基盤センターのWDSを使用した（分析条件：加速電圧 15kV、試料電流 3×10^{-9} A、ビーム径 $10 \mu\text{m}$ ）。

分析の結果、①の胎土中には、チャルチュアパ遺跡近隣のコアテペケ・カルデラを給源とする約 7 万年前の軽石であるアルセー・テフラの下部層の火山ガラスのみが見いだされた（図 1）。そのため、アルセー・テフラ下部を選択的に採取し、その軽石を砕いたものを坏土に加えて土器を製作したものと推定される。

また、①の土器片のひとつには、表面に最大 0.4mm 程度の厚さの化粧土が施されたものがあり、それにも小さな火山ガラス粒子が若干含まれていた。この火山ガラスの分析値に相当するテフラは、既存のデータに見出されなかったが、アルセー・テフラ上部に最も類似する。Na 値が顕著に低いことから、風化したアルセー・テフラ粒子が再堆積して混入した、より上位の土壌を坏土として使用した可能性がある（図 2）。

②の胎土中の火山ガラスの化学組成も、既存のテフラに一致するものが見出されなかったが、概括的には、アルセー・テフラ上部に類似し、また、上記の①の化粧土中の火山ガラスと似た値を示した（図 2）。②の出土地点には、アルセー・テフラが分布せず、また、アルセー・テフラより上位に多数の軽石の堆積が見られることから、②の土器の坏土が出土地点周辺で採取されたとは考え難く、これらの土器は、出土地より西方から持ち込まれたか、または、西方の坏土を利用して製作された可能性が指摘できる。

引用文献

柴正敏 2014 「津軽の地質と縄文土器原料」『第四紀研究』53(5): 249-257。

関根達人・近藤美左紀・柴正敏 2018 「火山ガラス分析による道東出土の亀ヶ岡系土器・晩期在地系土器の製作地推定」『釧路市立博物館報』422: 3-8。

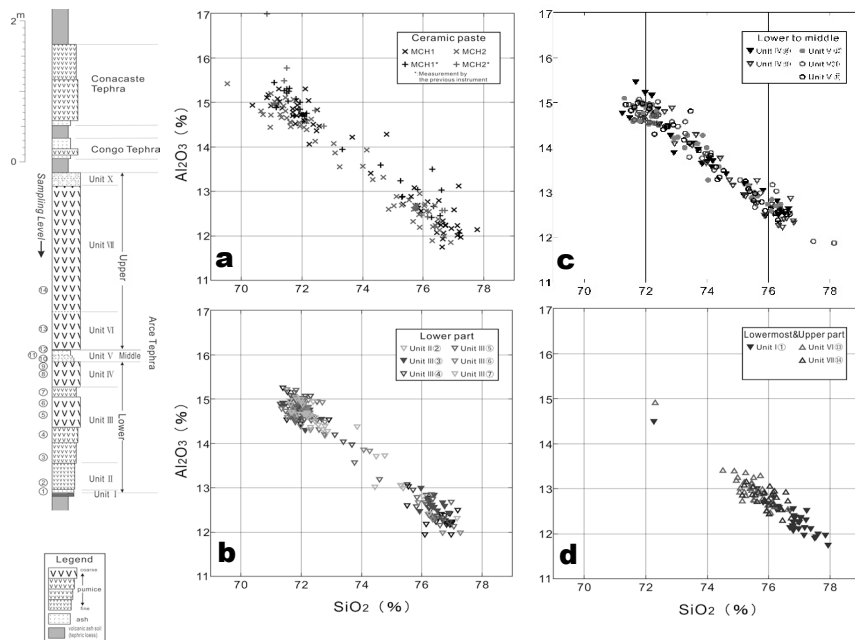


図1 チャルチュアバ遺跡で出土した土器の胎土中の火山ガラスと遺跡近くで採取されたアルセー・テフラの化学組成の比較
a) 土器胎土中の火山ガラス b) アルセー・テフラ下部 c) アルセー・テフラ中部
d) アルセー・テフラ最下部および上部

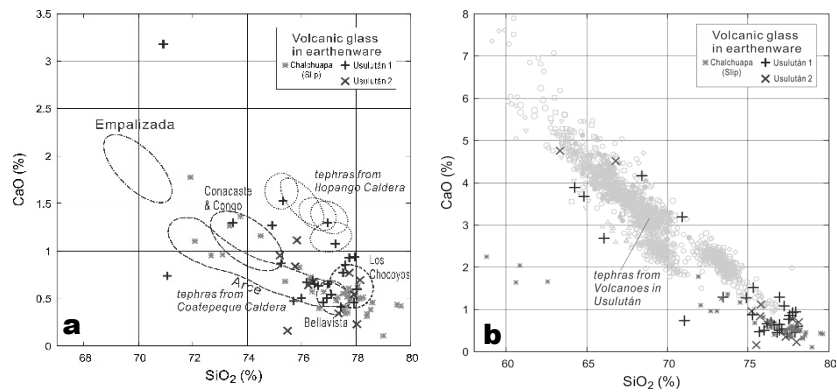


図2 チャルチュアバ遺跡出土土器の化粧土、および、ヌエバ・エスペランサ遺跡出土土器の胎土中の火山ガラスとテフラの化学組成の比較
a) 西部地域のテフラとの比較 b) 東部地域のテフラとの比較

テオティワカンの石材選好にみられる石の価値
—儀礼的文脈より出土した黒曜石製品を中心に—

千葉裕太（岡山大学）

テオティワカンのモニュメントより出土した黒曜石製品の分析の成果を発表する。テオティワカン考古学における黒曜石の色別分類では、出土する黒曜石製品は大きく緑色、灰色、赤～茶色の斑点を伴う「メカ」と呼ばれる黒曜石に分類される。そして緑色黒曜石は肉眼観察のみによりラス・ナバハス山脈産と推定されている。しかし実際には、茶色がかった緑色に見えるの黒曜石と、茶色がかった灰色に見える黒曜石が少なからず存在する。そのため、肉眼観察では色の判別が難しいケースがある。このことから発表者は、2023 年より科研費事業（JSPS KAKENHI 23K18710、代表：千葉裕太）において、理化学分析に基づく黒曜石製品の産地同定を実施してきた。「月のピラミッド」内埋設奉納群より出土した 500 点以上の黒曜石製品について、主に緑色黒曜石製品を中心に、ポータブル蛍光 X 線分析装置(pXRF)を用いた分析を行うことで、肉眼観察による「産地推定」ではなく、理化学的な「産地同定」を試みた。また「太陽のピラミッド」内より出土した 380 点程度の黒曜石製遺物についても、色を問わず、pXRF 分析による産地同定を実施した。本発表では、これらの分析の結果について発表する。

発表者は、テオティワカン遺跡「月のピラミッド」から出土した黒曜石製品の分析を 2007 年より継続して行ってきた。以前本学会（第 9 回西の本部会研究懇談会、2020 年）でも発表した通り、同モニュメント内の埋設奉納群から出土した黒曜石製品の型式分類/色別分類の結果から、特定の器種の製作においては色を判断基準とした石材選択の傾向があり、また時期によりその傾向が変化していたことは明らかである。発表者はこの選択傾向を、「選好（Preference）」＝「意思決定において、個人や集団が選択対象に対して持つ好み」として、経済学の用語を借りて表す。テオティワカンの人々による石材選択における好みは、考古学資料として物質的に残され、観察が可能であると考えられる。発表者は科研費事業（JSPS KAKENHI 25H01937、代表：千葉裕太）において、「太陽のピラミッド」内奉納セットなど、月のピラミッド内の埋設奉納群とは時期的にも空間的にも異なる文脈に属する黒曜石製品の分析を行った。本発表ではその成果を含め、両モニュメントにおける黒曜石選好の差異について発表する。

これらの分析の結果は、現代のテオティワカン考古学において肉眼観察により簡易的に分類される緑色・灰色・メカの 3 色への分類は、テオティワカンの人々の選好を探るうえで不十分である可能性を示唆している。本発表では、テオティワカンの人々が石材として黒曜石を選択する際に、色のほか、含有物や光の反射などに基づく細分類があった可能性についても言及し、これらの「カラーバリエーション」に対し、テオティワカンの人々がどのような物質的価値を見出していたか考察する。

モニュメントの先行研究・

「石柱の広場」複合体発掘調査から推測されるテオティワカンの国家政体

杉山三郎（岡山大学文明動態学研究所、アリゾナ州立大学）

杉山奈和（岡山大学文明動態学研究所、カリフォルニア大学リバーサイド校）

発表者は先行研究にて、「城塞」の主神殿「羽毛の蛇のピラミッド」、「月のピラミッド」複合施設、そして「太陽のピラミッド」複合施設を共同調査し、それらの内部に埋め込まれた埋葬体、奉納品、また増改築の資料を得て、その解析からテオティワカンにおけるモニュメントの象徴的意味や機能を解釈してきた。支配層が特異の世界観を記念碑的建造物に具体化し、戦士や神官などの多様な生贄儀礼を行っていたと実証し、軍事的色彩の濃い中央集権的な統治体制を提唱した。しかしながら、具体的な政治構造や支配者集団については十分に解明されておらず、特にその集団の実体（民族同定、DNA 解析など）や政府の中核となる行政施設、トップリーダーの住居（宮殿）などが不明瞭であった。

「石柱の広場」複合体プロジェクトは、テオティワカンの政治体制の実態を時系列で把握するという明確な目的を掲げ、国際共同研究として国家の中核施設であった可能性が最も高く、未発掘であった儀式・行政複合施設の調査を 2015 年から行ってきた。「太陽のピラミッド」と「月のピラミッド」の間、「死者の大通り」西に位置する「石柱の広場」は、テオティワカンで 4 番目に大きなモニュメント 3 つや、「城塞」、「月の広場」に次ぐ面積を持つ大広場などから成る儀礼場複合体であり、試掘ピット・トレンチ、また一部トンネル発掘により調査した。メキシコ政府の考古学審議会の指示により、遺構は全て保存・安全管理のため、現在は全て埋め戻した。「石彫の広場」と対を成し、「死者の大通り」東側に位置する「太陽のピラミッド北の広場複合体」を含めて約 16 万平方メートルという広大な複合体セットに対して、調査区域は全体の約 1% という予備調査的な発掘だが、都市形成の初期から崩壊に至るまでの建築的特徴の推移と年代の解明に役立ち、また様々な発見から複合体で行われた宗教的儀礼、集会など政治・社会的な活動、さらに交易や経済的側面を推察することが可能となった。特に早期のターミネーション儀礼の跡、マヤ王朝との直接的な接触を示すマヤ壁画の断片、多民族が参加したと思われる大宴会で使われた土器などの大量な残骸、生贄儀礼を受けた人骨の排斥場跡など、貴重な遺構、遺物・データを集積した。また、新たに作成したテオティワカン盆地の 3D マップを用い、古代都市の中心となる儀式地区間の比較空間分析も行っており、都市の中心軸である「死者の大通り」に沿って配置された 4 つの儀礼区域の都市景観のなかで、「石柱の広場」複合体の象徴的・機能的な位置付け作業も進んでいる。本発表では、コロナ期を除いた過去 10 年間の「石柱の広場」複合体プロジェクトの成果の一部を紹介し、現場のデータに則しながら国家統率者集団の政体について仮説提唱する。特に現在発掘を中心的に行っている、複合体の北部に広がる城壁に囲まれた複合施設が覇権的な国家の中心地であった可能性を示唆する。

マヤ文明の起源と地域間交流：
メキシコ、アグアダ・フェニックス遺跡の石器分析を中心に

青山和夫（茨城大学）
猪俣健（アリゾナ大学）

本研究発表は、メキシコのアグアダ・フェニックス遺跡および周辺遺跡における主要な調査成果を紹介し、特に発掘調査で出土した 47,461 点の石器分析の成果を報告する。国際調査団（アメリカ、メキシコ、グアテマラ、ドイツ、フランス、日本）は、2017 年以降、メキシコ・タバスコ州ウスマシント川中流域において高解像度 LiDAR、地上探査、発掘調査を実施してきた。その結果、従来知られていなかったアグアダ・フェニックス遺跡において、マヤ文明最古かつ最大の公共建築が確認された。

従来の学説では、マヤ文明は先古典期中期（前 1000～前 350 年）に小規模な村落から徐々に発展したと考えられてきた。しかし、『Science』に発表したセイバル遺跡の前 950 年頃の E グループに関する成果（Inomata et al. 2013）は、こうした通説を再考させるものであった。さらに『Nature』に発表したアグアダ・フェニックス遺跡の調査成果（Inomata et al. 2020）は、この新しい見解を強化・発展させるものである。

アグアダ・フェニックス遺跡は、セイバル遺跡と同様に河岸段丘上に築かれた。大規模な層位的発掘調査と豊富な試料の放射性炭素年代測定により、最大の巨大基壇（南北 1413m、東西 399m、高さ 15m）は前 1100 年頃に建造が開始されたことが判明した。これは定住生活と土器使用が始まった直後の時期に相当する。基壇の体積は 320 万～430 万 m^3 と推定され、これまで最大とされたエル・ミラドール遺跡のダンタ・ピラミッド（280 万 m^3 ）や古典期のいかなる神殿ピラミッドをも凌駕する規模である。

巨大基壇上の E グループの公共広場には、セイバル遺跡と同様に、グアテマラ高地産の翡翠製磨製石斧や土器などの供物が埋納されていた。さらに巨大基壇の東西両側縁には計 20 基の基壇が配置されており、太陽は 10 月 17 日と 2 月 24 日（130 日間隔）に E グループの東西軸線上に昇ることが確認されている（Šprajc et al. 2023）。古典期マヤの垂直的な神殿ピラミッドが王権の誇示と排他的利用の象徴であったのに対し、王権確立以前の黎明期においては、水平性の強調された巨大基壇が公共儀礼の舞台として重視された。巨大基壇の周囲には、幅 50～100m、最長 6300m のサクベ（舗装堤道）9 本や人工貯水池が配置されており、これらは現在知られる限りマヤ地域最古のサクベである。

石器分析では、出土品を型式別に分類し、長さ・幅・厚さ・重量などの属性を計測した。また、黒曜石の産地同定にはハンドヘルド蛍光 X 線分析計を用いた。その結果、オルメカ文明のラ・ベンタ遺跡に搬入された黒曜石の大部分がメキシコ高地産であったのに対し、アグアダ・フェニックス遺跡の黒曜石製石器は全てグアテマラ高地産であり、特にエル・チャヤル産が大部分を占めることが明らかとなった。

これまでマヤ文明の起源に関して、メキシコ湾岸で栄えたオルメカ文明の一方的な影響によって興ったとする説や、マヤ低地で独自に興ったとする説が提唱されてきたが再考する必要がある。マヤの人々は、地域間交換を通して、グアテマラ高地産の翡翠や黒曜石、海産貝のような重要な物資だけでなく、観念体系や美術・建築様式等の知識を取捨選択しながら交換して、マヤ文明を築き上げていったのである。

Inomata, T., D. Triadan, K. Aoyama, V. Castillo, and H. Yonenobu 2013 Early Ceremonial Constructions at Ceibal, Guatemala, and the Origins of Lowland Maya Civilization. *Science* 340(6131):467-471.

Inomata, T., D. Triadan, V. Vázquez López, J. Fernandez-Díaz, T. Omori, M. Méndez Bauer, M. García Hernández, T. Beach, C. Cagnato, K. Aoyama, and H. Nasu. 2020 Monumental Architecture at Aguada Fénix and the Rise of Maya Civilization. *Nature* 582(7813):530-533.

Šprajc, I., T. Inomata, and A. F. Aveni 2023 Origins of Mesoamerican Astronomy and Calendar: Evidence from the Olmec and Maya Regions. *Science Advances* 9(1):eabq7675.



アグアダ・フェニックス遺跡から出土した先古典期中期前半の黒曜石製石器（青山和夫撮影）